

アバンティ
私のAvanti

高瀬乃一 小説家

「やあ、またこの角でお会いましたね。あなたもアバンティですか？」

空っぽのまま生きていた20代前半、土曜の夜になると、ラジオから優しい紳士の声が聞こえてきた。1992年から2013年まで放送されていたラジオドラマ「サントリー・サタデー・ウェイティング・バー、アバンティ」の始まりの台詞である。

その紳士は番組の進行役で、イタリアンレストラン「アバンティ」のバーカウンターに腰を下ろし、客たち(という設定のゲスト)が交わす話に耳を傾ける。

その客たちの職種は様々で、エンターテインメント限らず、研究者や文化人など幅が広がった。リスナーの私はこの時間、確かに元麻布のジャズが流れるバーにいて、未知の世界のほんの一部を耳にしていたのだ。

初めて八戸ブックセンターに足を踏み入れた時、あの幻のアバンティにたどり着いたような感動を覚えた。

「なんとも目立たない入り口ですが、土曜日夕方のこの店のウェイティング・バーは、常連客が集まって賑やかになるんです」

お決まりの台詞が再び頭の中に聞こえてきた。まさにここも目立たない入り口の先にあり、隠れ家を見つけた喜びに胸が高鳴る。本の匂いより先に鼻先に届くコーヒーの香りをまとい、書棚に恐る恐る近づくが、どこに目を向けたらいいのか最初はまごついた。今まで通った本屋のように、書籍の並びは出版社別でも著作者の五十音順でもないからだ。その戸惑いは、初めて訪れたバーでどこに座ったらいいのか迷うことに似ているかもしれない。

未だ自分の読書嗜好がわかっていない私は、真っ直ぐ書棚に向かえずちょっとだけ怖気づく。でもせっかくだから何か1冊と、知ったかぶりの顔を浮かべてカウンターそばの棚へ。

こうして私が最初に手に取ったとりあえずの1冊は、染織家・志村ふくみさんの『一色一生』だった。染織にかける想いを綴った柔らかな文の中に、こんな一節を見つけた。

「勘(物を作ること)は天から与えられるものではなくて、失敗し、振り回されてもひたすらに技に打ち込み、それを守り育てることによって、はじめて与えられるものだ」

それまで文学賞に投稿すれば落選続き。年齢を考えるともう書くのは止めた方がいいかもしれない、と考えていた矢先に目に飛び込んできたその言葉は、私の人生をほんの少しだけ変えてくれた。

この本を手にとらなければ、オール読物新人賞に応募する勇気は出なかつたらう。

イタリア語の「Avanti」は日本語で「前へ」「お入り」「進め」などと訳されるそう。

最近では、ブックセンターに入ると一直線に足を運ぶ棚ができた。そして、ゆったり店を回る客たちや、店の前を素通りしていく、でもちょっと気になるなと目を細めていく通行人たちを眺め観察してみる。店の主役は本だけれど、集まる人が好奇心をもっていて初めて成り立つ場所だと、ここに来ると思うのだ。

誰もが心の中に理想のバー「アバンティ」を持っている。私にとってのそれは、たぶん八戸ブックセンターなのだろう。

高瀬乃一 noichi takase

小説家

フリーペーパー「ほんのわ」(2021)

1973年生まれ。青森県三沢市在住。2020年、時代小説「をりをりよみ耽り」で第100回オール読物新人賞を受賞。『オール読物』(文藝春秋)で「貸本屋おせん」シリーズを発表しているほか、去年はデーリー東北でリレーエッセー「ふみづくえ」の執筆も務めた。

